

ふれあい囲碁の教育的効果

北海道師範塾理事

札幌市立北小学校教諭 橋爪里佳

ふれあい囲碁は日本棋院東京本院所属 (<http://www.nihonkiin.or.jp/index.html>) の安田泰敏氏が始めた。安田泰敏氏は最高段位である九段の囲碁棋士 (2012年7月6日現在) である。

安田氏は平成5年、中学生が自殺したニュースを見て、自分に何かできないだろうかと教育現場に単身飛び込み、ふれあい囲碁の活動を始めたのだ。

先生を殴る保育園児、92歳の痴呆症状が出ているお年寄り、発声もままならない4歳のダウン症の子、学級崩壊している学級の中学生がふれあい囲碁で劇的に変化したという事実が安田泰敏著『命を救う「ふれあい囲碁」』(生活人新書) という本に書かれている。現在は、国内だけではなく、国外でもふれあい囲碁を広めているようだ。

教育的効果のあると思われる、ふれあい囲碁を私も小学校1年生の子どもたちに実践した。

実践を通して、私が考えるふれあい囲碁による教育的効果は以下の5点である。

- ① どの子ども取り組むことができる
- ② 自然に交流が生まれる
- ③ 逆転現象が起きる
- ④ 一番病を改善することができる
- ⑤ 静かで知的な空間を体感することができる

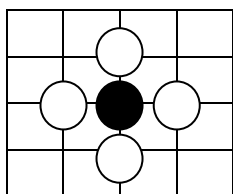
これらについて以下詳しく述べていく。

1. どの子ども取り組むことができる

ふれあい囲碁のルールは極めて簡単である。囲めば勝ちとルールがシンプルである。そのため、小学校1年生も無理なく取り組むことができる。受け入れやすい。

以下、詳しいルールを説明する。

2人でじゃんけんをした後、勝った方が先攻となる。先攻は黒、後攻は白の碁石を順番に置いていく。碁石の置く場所は線と線がぶつかった所。相手の碁石を囲めば勝ちとなる。下の図のように、相手の行く道を塞げば良いのだ。



相手の碁石を囲めば、相手の碁石を取ることができる。ここで終了。短時間で取り組むこともできる。

私の受け持っていた小学一年生のどの子ども、すぐにルールを理解することができた。勉強ができる、できないは関係なく、ふれあい囲碁はどの子ども取り組むことができる。

2. 自然に交流が生まれる

私は教室にふれあい囲碁セットをいくつも用意していた。休み時間は子どもが自由に使

っていいことにしていた。すると、子ども同士が「一緒に囲碁しよう」と自然に交流を始める。囲碁をしていると、その様子を見に来る子もいる。囲碁をしている子同士だけではなく、見ている子ともふれあいが生まれる。

ふれあい囲碁を続けていくと、普段あまり関わりをもたない子ども同士でも交流が生まれる。

休み時間は元気よく体を動かして遊ぶ子、静かに本を読んだり、絵を描いたりして静かに過ごしたい子と過ごし方は様々である。元気よく遊びたい子と静かに過ごしたい子は休み時間の関わりが少ない。しかし、ふれあい囲碁を学級に取り入れることで、いつも元気よく遊んでいる子と教室で静かに過ごしている子がふれあい囲碁で一緒に休み時間を過ごすようになる。気がつくやうに、教室のあちこちに珍しい組み合わせでの対戦が見られるようになる。これもふれあい囲碁のよさである。

また、ふれあい囲碁に取り組むと、家でもふれあい囲碁をし始める子が出てくる。意外にも、学校ではそんなにふれあい囲碁に熱中しているとは思われなかった子が家で親とふれあい囲碁をしていた。

子どもが家に帰ってから親にふれあい囲碁のルールを説明し、一緒に対戦するのである。家庭によっては囲碁がない所もある。囲碁がない場合は、オセロでふれあい囲碁を行っていた。学校だけではなく、家庭でもふれあい囲碁で親子のふれあう時間が生まれていた。

3. 逆転現象が起きる

ふれあい囲碁では、勉強ができる、できないに関係なく勝敗が決まる。学級であまりお勉強ができる方でなかった A くんは、ふれあい囲碁をしても負けてばかりであった。しかし、毎日続けていくうちに学級一勉強ができる B くんにも勝つようになっていった。B くんは最初ふれあい囲碁も負け知らずだった。その後も B くんが A くんには負けることがしばしばあった。

子どもの上達は早く、慣れてくると私にも勝つ子が出てきた。お勉強ができる B くんだけではなく A くんまでにも負けるようになってしまった。

「先生弱いなあ」

と言いつつも、一緒に囲碁をしたがった。

勉強ではどうしても勝てない子に勝てた。先生に勝てた。

この経験が A くん自信につながっていった。

4. 一番病を改善することができる

ふれあい囲碁の実践から一番病を改善することができるという話を聞いた。ふれあい囲碁を実践することで、それが良く理解できた。

発達障害の子の中には、勝ち負けにこだわる子がいる。

一番でなくては気が済まない。

そのため、負けた時、一番が取れなかった時にはその事実を受け止めきれず、パニックを起こしたりする。

これは一番病と言われている。

ふれあい囲碁は、気付いたら勝敗が決まっているということが多く。負けてしまったとあっけにと取られながらも、笑顔で終わることができる。

ふれあい囲碁は、負けを受け入れやすいのである。

私の学級にも一番病と思われる子 C くんがいた。100枚の札を5色に分け、1回20枚で行う五色百人一首がある。学級で五色百人一首を取り入れた際、C くんは負けて泣きだし札を投げた。みんなで五色百人一首をやっている、C くんはやらない日があった。

Cくんがやらないことも認めた。無理はさせなかった。見ているだけでもよしとした。五色百人一首にも一番病にはよい効果があると聞いていた。目安は100回。あきらめずに五色百人一首を続けた。すると、しだいにCくんが参加するようになった。そして負けを受け入れるようになり、しまいには五色百人一首が大好きになっていた。その頃には、暇さえあれば百人一首を暗唱していた。

ふれあい囲碁を取り入れる前に一番病がすでに改善されていたこともあり、ふれあい囲碁で負けて怒りだすことはなかった。しかし、百人一首を行うより前にふれあい囲碁を行っていたら、もっと早く一番病が改善できていたのではないかと思う。

Cくんを含め学級の子は誰1人負けてふてくされたり、怒り出したりする子はいなかった。どの子も勝っても負けても笑顔で対戦を終えていた。

5. 静かで知的な空間を体感することができる

活発な子でも、ふれあい囲碁を始めると集中し、騒いだり教室内を走り回ったりすることがなくなる。

小学1年生にふれあい囲碁を実践した際、1学期に全体指導したが、ブームにはならなかった。なぜなら、ふれあい囲碁をやる機会がもてなかったからだ。

子どもたちは中休みには体育館や外で体を動かして遊ぶ。勤務校は掃除が終わった後の残りの時間が昼休みとして設定されていた。一年生の初めは、掃除に時間がかかる。掃除が終わると、図書室で本を借りたり、返したりした。それで昼休みは終了。

授業の隙間時間などには五色百人一首に取り組んでいたのも、しばらくふれあい囲碁を行っていなかった。

3学期になり、掃除もすばやく終わらせることができるようになった。子どもたちは昼休みの時間を多く確保できるようになった。昼休み、体育館は高学年の割り当てとなり、低学年は体育館で遊ぶことができなかった。活発な子どもたちは外で遊びたがるが、冬なので外に出るには、スキーウェアを着なくてはならない。スキーウェア上下を着て外に出るだけの時間はない。行き場のないDくんは、友だちを教室内で追っかけまわしたり、戦闘ごっこをしたりするようになった。Dくんは落ち着きのない子だった。

そこで私は「教室の中を走ってはいけません」と叱る代わりに、「先生とふれあい囲碁をやろうよ」とCくんをふれあい囲碁に誘った。するとDくんは喜んでやって来た。

1試合が終わる度に、「先生、もう一回やろうよ」とDくん。飽きずに何度も対戦を行った。

Dくんは、ふれあい囲碁の時には集中した。

真剣な眼差しで、囲碁の盤を見つめ、碁石をどこに置こうか必至で考えていた。Dくんのような落ち着きのない子にとって、シーンとした時間をもつというのは大変重要である。周りが騒がしかったり刺激が多すぎたりするとずっと興奮状態になってしまう。その興奮状態が周りの子にも波及することもある。

普段は騒がしいDくんだったが、ふれあい囲碁を行うことで静かで知的な空間を体感することができたのだ。

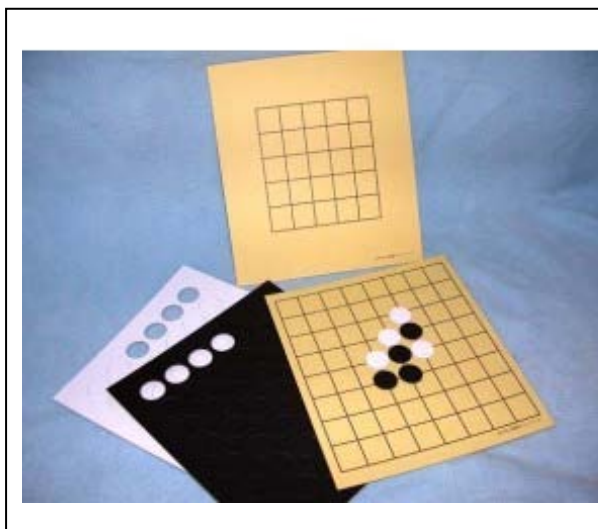
このように、教育的効果のあるふれあい囲碁を学級に取り入れることで学級経営にプラスに働いた。先を読む力、考える力も子どもたちにつく。これからも知的で楽しく取り組めるものを取り入れていきたいと考える。

□その他

ふれあい囲碁については「ふれあい囲碁ネットワーク」のHP

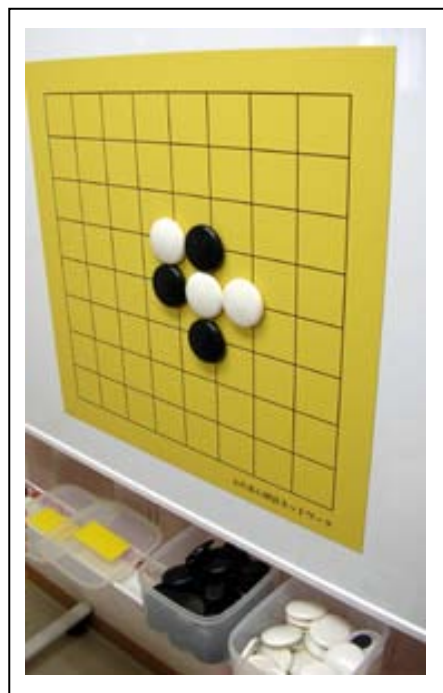
(<http://www.fureaiigo-net.com/index.php?FrontPage>) から購入可能である。

【紙製9路盤セット】



(ふれあい囲碁ネットワーク HP より)

【マグネット式囲碁セット】



紙製9路盤セットは1セットごとに、チャック付きのビニル袋に入っている。一対一の対戦の時に使用する。

マグネット式囲碁セットは、教室の黒板に貼って使用した。ふれあい囲碁を導入する際にこれを使って子どもたちに説明をした。

説明する際は、教師が一方向的に説明をするのではなく、子どもたちにマグネットを貼らせた。

『命を救う「ふれあい囲碁」』（生活人新書）にも書かれているが、碁石を置く場所、相手の碁石を囲むというのがどういうことを子どもたちに理解させるためである。

団体戦を行う際にもマグネット式囲碁セットを使用した。黒チームと白チームに分かれて対戦する。

子どもたちをそれぞれ1列に並ばせ、1回碁石を貼ったら、列の後ろへ。一人ずつ順番に碁石を貼る。団体戦は、ふれあい囲碁のルール説明後に行った。

参考文献

安田泰敏著『命を救う「ふれあい囲碁」』（生活人新書）

参考HP

TOSS ランド (<http://www.tos-land.net/>)

No.3051556 「囲碁マスター」

<http://byakusen.la.coocan.jp/sonota/igo/top.html>

No.8383350 「ふれあい囲碁（最初の一步）個人指導の巻」

http://heartland.geocities.jp/globalmanager924/fureai_igo.htm

No.1028714 「（ふれあい） 囲碁」

<http://home1.catvmics.ne.jp/~k-mitsu777/fureaiigo1ji.html>